名城大学FD委員会

Meijo FD NEWS

Meijo University Faculty Development News

Vol.2

2004.3

教育改革を積極的に推進！

◆大学教育開発センター　センター長メッセージ
◆第4回学内FD講演会「大学力を創るFD」報告
◆名城大学初の試み【授業参観／同僚に学ぶ】報告
◆平成15年度通年・後期科目「学生による授業評価アンケート」結果
◆人間学部で「自己発見レポート」を受検
◆TOPICS（中日新聞掲載）・推薦図書紹介

ご挨拶

大学教育開発センター
センター長
杉下 潤二

FD活動による授業改善で、教育環境のレベルアップ。

授業改善に一層の工夫と努力をしよう。

数年前とは異なり、FDとはフロッピーディスクのこと? なんていう人は今はいない。しかし、各教員のFD活動による授業改善がその後も継続的に進んで学生の理解度が高まり、学生の改善要求度が低くなりつつあると断言することはできない。

たとえば、平成14年度通年・後期と15年度通年・後期の「学生による授業評価アンケート」の総合満足指標を比較すると、15年度の方が0.8ポイント低い。この結果は、本学のFD活動が不十分だということではない。どちらかというと理解度の遅い学生の評価では上昇している。にもかかわらず、よくできる層や意欲的学生の評価が1.7ポイントも低くなったためと思われるからである。

したがって、この事実は教員が理解不足学生をなくすための授業改善努力を行った証しでもあるが、授業改善努力の難しさ、学生評価の多面性を物語るものともいえる。真の授業改善は、能力ある学生にはその芽をさらに伸ばす工夫を、理解の遅い学生には安易に手を貸すのではなく鍛錬や演習を義務化するなどの指導策と工夫が必要である。

本紙、FD NEWSの表紙をご覧いただきたい。階段があって、学生を鍛え指導し、学生が自らの力で登ってくるのを最上段で待つタイプの指導、学生指針を与え先に登らせ後からケアしながら続くタイプの指導、学生と一緒に理解度を共有しながら階段を登って行くタイプの指導、さまざまな指導法があっていい。しかし、いずれの方法をとるにしても、常に熱い視線を学生に向けていることが肝要である。諸先生方の尚一層の改善努力を期待して挨拶にかえます。

そして最後は教職員一人ひとりの努力

[If you can imagine it, you can create it.
If you can dream it, you can become it.]

凡庸な教師はただしゃべる
ちょっと優れたましな教師は理解させようと努める
より優れた教師は自分からやってみせる
本当に優れた教師は心に火をつける

[イギリスの教育哲学者ウィリアム アーサー ワード(William Arthur Ward)の言葉]

名城大学 学内FD講演会

第4回 大学力を創るFD

～学生による授業評価アンケートから授業をどう変えるか～

▲大学のFDについて講演いただいた池田輝政教授

▲池田教授の講演を熱心に聞き入る参加者

平成15年11月13日に名古屋大学高等教育研究センター（平成16年度より本学人間学部教授）の池田輝政教授を講師にお招きして、「大学を創るFD～学生による授業評価アンケートから授業をどう変えるか～」を開催しました。

アンケートコメント

講演会全体を通した感想

教育職員

・信頼関係が大切。配慮といっても、その質や、何に対するかが問題というのはよく解った。
・プロの自覚を持って学生への授業をしないといけないことの重要性が分かった。学生による授業評価アンケートも参考にしながら、授業の改善をする必要性もあることが分かった。
・学生を「楽しませる」という考え方には、少し抵抗を感じた。授業法に関して、参考になることがかなり多かった。
・池田先生は自分の講義に自信をもっている。これだけの自信を持てるようなレベルまで授業の改善をおこなわなければならない。
・「ケアの心」に興味を持ちました。今後に活かしたいと思います。

大学院生

・これまでFDについて、ほとんど知らなかったので非常に新鮮な感じで講演を聴けました。先生が授業の進め方について悩んでいるのを見て、あらためて人に教えることは難しいことであると認識しました。

事務職員

・納得させられる意見が多くありました。また話をする相手を納得させる上で、注意力を引き付ける工夫など勉強になる点もありました。FDに関しては本学は最先端といえる活動を行っていますが、それに満足せず、さらに発展させていくという意志を教職員全体で共有して行かねばと感じました。
・本学の取り組みに沿った内容で良かったのではないか。又、講演の内容にもあったが、伝えたいポイントも明確であり、本学が歩むべき今後を多くの教職員が共有できたのではないか。

よりよい授業への取り組みとしての提案

教育職員

・プロの自覚と力量にかかわる指標といわれた各項目について、教員サイドの意図と学生サイドの受け止め方にギャップが生じる可能性が高いと感じた。講演の中でもふれられた授業計画の項目についても、このギャップが大きいという感じがする。
・ベストティーチャーをめざす道と、バッドティーチャーにならない道は少々異なる。自分はどちらをめざすのか、考えてみたい。

事務職員

・先生の講義の進め方はもちろんのこと、学生の学習意識の向上も重要な課題になっていることと思います。
先生だけでなく、学生にももっと「FD」というものを身近に感じてもらえるようになるといいと思います。

その他の意見

教育職員

・授業中は学生とのコミュニケーションの機会を増やし、ケアする心を絶やさないようにしたい。ケアと業を心がけたく思う。

大学院生

・やはり学生にやる気を出させる（興味をもたせる）事が最も重要で、最も難しいことであると思います。学生の学業への意識向上のための先生方の創意工夫が実を結ぶことを期待します。

事務職員

・全学としての取り組みなので、FD活動に関する理解の深化を図れる機会が今後も必要なのではないかと思います。

～第4回 学内FD講演会 講演録より改編～

「学生による授業評価アンケートから授業をどう変えるか」

これは、FDとしてはアドバンスレベルのテーマです。この3年で70ほどの大学をまわった時に、「なぜFDが大事なのか」という意識改革のFDが半数以上でしたから。名城大学は、授業評価アンケートの情報をどう授業に役立てるかというレベルまできている。

教育というものは、全ての学生を成長させることはできない。しかし、どの学生を成長させられるかどうかも分からない。だから、全ての学生に向かって成長させるためのケアを常にしなきゃならない。最初の出会いでは、学生と対話することから始める。ケアの心ですね。

■FDの第1ステップ

「学生による授業評価アンケートから授業をどう変えるか」という問いについて、名城大学の授業評価アンケート項目にそって考えてみる。

アンケート項目の中の、位置づけ、ポイント、発言促進、理解配慮、興味工夫、総合満足の6項目は、プロの自覚と技量にかかわる指標とみた。幾つかのベストティーチャーをやっているところの大学の情報を分析して、このプロの自覚と技量の項目に当たる言葉が、ベストティーチャーの理由の根拠になっていることが多いのです。

たとえば、『位置づけ』の趣旨は、自分の授業が将来に対して通用性の高いものを教えているのか。『発言促進』の情報は、相手をケアしながら、その場その場で臨機応変に対応するという、いわばクラス・マネジメント力。

まず、これらの項目を大事にしよう。

■FDの第2ステップ

授業はまさにダイナミックなものです。『授業計画書』（授業計画は履修に役立つ）という言葉の中には幾つかの意味が含まれます。

Course Selection（選択履修）のためのCourse Description（概要）がちゃんと与えられたかということ。そのためにはCourse Objectives（教授と学習の目標）、Method of Instruction（どういう方法でどのような教材を使うか）、Course Requirements and Assignments（成績判定のためにどのような課題を与えてどの程度重視するのか）といったCourse Design（授業の基本設計）が必要で、こういう知的作業やプロセスがきちんと準備できるようになる。

FDがこういう第2段階まで入って実績があがれば、名城大学が他の大学をリードできて、色々そのノウハウを提供できるリーダーシップが取れるようになれるのではないのでしょうか。

この講演の内容は第4回学内FD講演会の講演録に掲載されておりますので、どうぞご覧下さい。

第4回学内FD講演会にご協力頂きましたみなさま、ありがとうございました。
講師の池田輝政教授は、平成16年4月より、我が名城大学人間学部の教員として教鞭をとられることとなりますので、同僚としての池田教授とともに名城大学のFDを大学全体で創っていきましょう。

Program

名城大学初の試み

【授業参観／同僚に学ぶ】

今回の【授業参観／同僚に学ぶ】は、名城大学初の試みであり、同僚が互いに学びあう風土づくりの一端を担うはじめの一歩となりました。
全28回のプログラムに延べ132名の教職員が参加し、そのうち10名の非常勤講師に参加いただきました。
【授業参観／同僚に学ぶ】では、授業参観後に、授業担当者を囲んでフリートーキングによる授業検討会を実施し、授業改善のためのアイディア等を教員間で共有する機会をもちました。実際に、今回授業検討会では、学生に対する熱い思いや、授業での悩み、授業におけるアドバイスなどが教員同士で熱っぽく語られました。
【授業参観／同僚に学ぶ】を進めていく中で、大学全体で互いに学びあう風土を自然と創りあげることができればと思います。

▲学生と同じ視点で授業を参観（「分子生物学Ⅱ」）

▲同僚の授業からヒントを得る（「西洋建築史」）

▲さまざまな意見が飛び交った授業検討会（「総合演習」）

平成15年度　後期科目公開授業一覧

連番	教員名	開講学部	授業科目名	授業振り返りシートの参観者のコメントから
1	杉下 潤二	理工学部	機能性複合材料	一方的な講義でなく時々学生に問いかける講義の進め方が非常に良い。
2	稲垣 行一郎	経営・経済学部（教職課程）	総合演習	学生参加型の授業。ゲームの感覚から話し方を学習していると推定される。
3	メアリー・野口	人間学部	ベーシック・イングリッシュⅡ	学生が楽しく学んでいた。種々工夫がされていて、学んでほしいという熱意が見える。
4	板橋 一雄	理工学部	地盤力学Ⅱ	ノートが写真付。学生さんは「名前を呼ばれる」ことをとても大事に思うだろう。
5	海老澤 俊郎	法学部	行政法Ⅰ	要点を事例を上げて解りやすく解説されている。
6	金田 典雄	薬学部	分子生物学Ⅱ	前回の復習を学生に質問して、記憶を呼び覚ます。マンガの紹介（理解を深める材料）。
7	清水 教之	理工学部	物性基礎論Ⅱ	黒板の4面をさらに2分割した板書。ていねいに指導されていることが伺われる。
8	天野　浩	理工学部	半導体工学	先生から学生への一方通行の講義でなく、対話形の授業がとても参考になった。
9	勝浦 正樹	経営・経済学部	統計学Ⅱ	標本分布について視聴率などの身近な問題（統計的手法）であきらかにしている。
10	亀井　鑅	薬学部	機能形態学	学生が書き終わったかを常に確認し、ポイントを伝えながら授業を進めている。
11	伊藤 志のぶ	経済学部	ミクロ経済学入門	授業について、教室の中を歩いて話しかける。質問、希望などを書かせている。
12	服部 友一	理工学部	材料統計学Ⅱ	生活に密着した例を取り上げ、学問を身近に感じさせている。
13	平山　勉	短期大学部	マルチメディア演習	学生個々のレベルに合わせた教え方がされている。
14	都竹 愛一郎	理工学部	情報理論	今日は何の授業テーマにするのか最初に話す。重要なポイントを最初に示す。
15	中澤　清	薬学部	放射薬品化学	黒板を4枚使用し、キーワードが残っていることは重要に思えた。
16	上山　智	理工学部	半導体工学	大変わかりやすい講義であると思う。グラフで説明するのは効果的。
17	長澤 崇雄	理工学部	ドイツ語Ⅳ	ところどころ英語と対比することで、理解を助ける。
18	岡本 浩一	薬学部	物理学Ⅱ	板書が非常に大きく丁寧な文字で十分な時間がとられ分りやすい。
19	楊　剣鳴	理工学部	システムコントロールⅡ	PCを使うとともに、黒板ではっきり説明されました。
20	三浦 彩子	理工学部	日本建築史	板書は字が大きく、絵も大変上手く書かれ、配置もよく芸術的である。
21	山ノ井 基臣	理工学部	制御工学Ⅲ	簡単な問を黒板でやらせる。双方向授業となり有効。
22	牛嶋　正	都市情報学部	都市経営論	非常に明瞭で、スピードも適切で、話題の展開も円滑であった。
23	大西 幹弘	経営学部	情報産業組織論	移動しながらの講義と質問が、授業に緊張感を生んでいる。
24	河村 英昭	理工学部	エネルギー変換工学	学生に簡単な質問をし、理解の進度をはかりながら進められている。
25	岩谷 素顕	理工学部	電気回路理論	「技術者として求められること」。これは将来を位置づけた視野につながる。
26	P.S.ビーチ	人間学部	ベーシック・イングリッシュⅡ	旬のテーマを取り上げることで、学生の興味を引いている。
27	塩入 孝之	農学部	化学	歴史的な事実を組入れているので興味を持ち易い。
28	畔柳 武司	理工学部	西洋建築史	歴史の経緯から順に説明するなど、テキストではわからない詳しい点まで解説している。

参観授業紹介

理工学部「機能性複合材料」

杉下 潤二 教授

▶▶▶ 授業参観のポイント・一言

受講生の理解度と授業のスピード。理解度を増すようにするとどうしても学習する量を減らさなければなりません。長年の悩み・迷いでした。いい方策を見いだせないままやっています。

『理解度カード』を用いた授業展開……この授業では、杉下教授オリジナルの『理解度カード』を用い、授業時に学生の理解度をチェックしながら進められるスタイルが参観者の印象に残った。また、この『理解度カード』を用いた授業展開は、学生自身の学習意欲を高める効果もあるようである。授業検討会でも、『理解度カード』が話題の中心になり、「分からなかったら聞きなさい‥と学生に言うだけの姿勢では、学生の理解度に気配りをしていることにはならないのだということに、はっと気づいた」という参観者の声も聞かれた。

授業振り返りシートから…

- **授業の進度についてアンケートの考察**
  講義のはじめにアンケートの分析について学生に説明したことは、非常に効果的であり、学生も聞き耳をたてていた。
- **理解度カードの利用**
  各自が上昇によって、丸をつける位置をかえる。自己採点の勧め。
- **授業に関するアンケートの実施**
  事前に授業に対する学生の意向・意欲を探る努力がなされている。
- **板書図について**
  板書されるグラフも大きく分かり易くイラストされている。非常にグラフィックで、その講義説明もまた好感が持てます。白と赤、黄色のチョークの使い方も視覚的でした。

人間学部「ベーシック・イングリッシュII」

メアリー・野口 助教授

▶▶▶ 授業参観のポイント・一言

英会話の練習をしますので、できるだけ英語で参加してください。学生のグループの輪の中に入り、学生と英語のコミュニケーションの経験をしていただければと思います。

『学生とルールをつくる』……この授業は英語onlyの授業である。参観者も学生のグループの輪の中に入り、授業を体験することができた。授業の中では、メアリー助教授の幼少の頃の写真を見ながらその頃の話を聞くことで、アメリカの文化を学ぶ場面も見られた。

学生の目が生き生きしており、「授業に行くのが楽しみ」と話してくれた学生の顔が印象に残った。また、授業に参加した参観者からも「非常に楽しい授業だったなあ」と感嘆の声が聞こえた。

授業検討会では、メアリー助教授の遅刻対策について聞くことができた。授業では、『グループ分けをしてから遅刻してきた学生は、教室に入れない』というルールをつくり、学生もそれを了承している。メアリー助教授は、「昔は遅刻してきた学生を怒ったこともあったが、それは双方にとって、いい効果ではなかった」と語った。

学生との間にルールを設ける。このスタイルになってからは、授業の雰囲気がよくなったとの話はとても説得力があり、参加した先生方も大きく頷いていた。

授業振り返りシートから…

- **授業手法**
  学生が楽しく学んでいた。ベストの環境と思う。種々工夫がされていて、学んでほしいという熱意が見える。
- **授業の工夫**
  3種類のグループ（クイズ形式、会話形式、研究形式）の参加型の授業を行い、プレッシャーをなるべく与えないようにしながら、日本語禁止を守らせている。
- **授業の前の準備**
  前もって項目を板書しておき、その後ほとんど黒板を使わないのは段取りとして合理的。
- **学生の表情**
  どの学生も、非常に生き生きとしていて、楽しそうに話し合っている。

参加した教員の声

「今まで名城大学では、このような、同僚が互いに学びあう場を全学の教員間で持つ機会がなかった。名城大学でこういう取組みが始まったことはとてもうれしい」
「私は非常勤講師として企業から名城大学にはじめてきて、他の先生の授業を聞く機会がなかったので、是非とも参加したいと思い、今回参加した。専任・非常勤講師ともに、授業を創り上げていく空気につながっていけばよいと思う。」
「参観者が少ないのが残念だ。もっと多くの人に参加してもらえるようになったら、大学の授業は交流し、個々の教授能力も向上していくと思う。」

○よりよい授業を創っていくために…

平成15年度通年・後期科目「学生による授業評価アンケート」

実施期間:平成15年12月8日(月)～12月20日(土)

1年間の授業改善の成果が『目で見える』フィードバックSTART!

FD委員会では、大学の教育・授業を考え、より良くしていくために、平成12年度通年・後期科目から全学一斉に「学生による授業評価アンケート」を実施しています。

実施率は、平成12年度94%、その後は98%前後と高く、本学で授業を担当する専任教員、非常勤講師とともに、FDに対して積極的な取り組みをしているといえるでしょう。

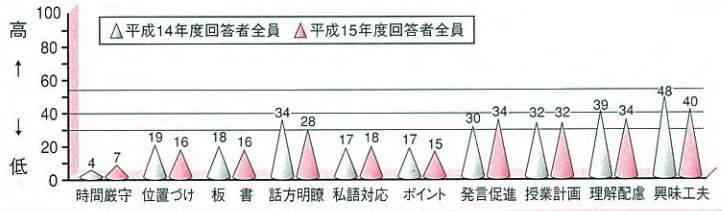
◆学生による授業評価アンケート実施率(大学全体)◆

実施時期	実施率
平成12年度 通年・後期	94 %
平成13年度 前期	98 %
平成14年度 通年・後期	98 %
平成15年度 前期	98 %
平成15年度 通年・後期	97 %

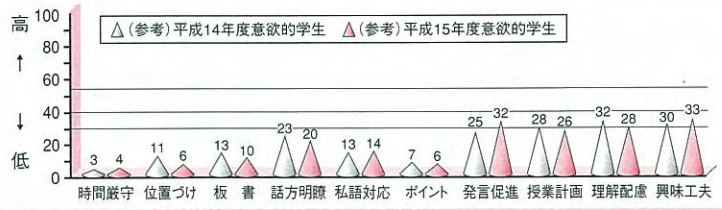
平成14年度通年・後期と平成15年度通年・後期の比較分析

〈改善ポイントシートイメージ〉

(1) 改善要求度(全体)



改善要求度(意欲的学生)

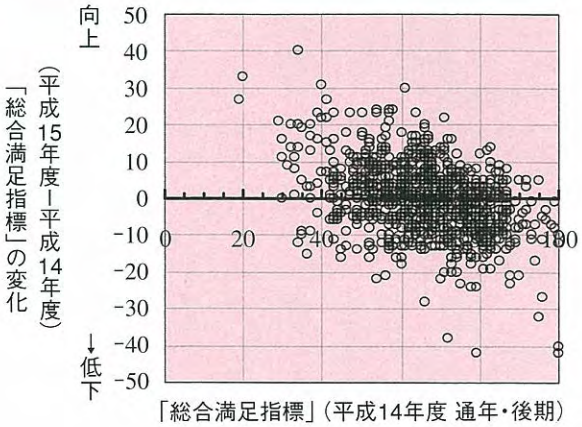


(2) 改善ポイント

「興味工夫」において改善が望まれます。
「発言促進」「授業計画」「理解配慮」については改善の余地があると思われます。

平成14年度通年・後期科目から、企業で顧客満足度を分析するために使用される手法である「CS分析」を応用する形で、名城方式ともいえる新しい授業評価アンケートの分析方法を開発し、フィードバックを行ってきました。

それから1年、平成15年度通年・後期科目の「学生による授業評価アンケート」では、前年度の授業評価アンケートの結果を受けて授業改善を試みた結果がいかほどであったか、その結果を前年度と比較する、新たなフィードバックを行いました。



その結果、平成14年度通年・後期に「総合満足」が低かった科目において、平成15年度通年・後期科目での「総合満足」の値が向上している傾向があり、特に、1年前に「総合満足指標」が40未満(満足度は100が最高)と、かなり低かった科目のほとんどが、その値を向上させていることがわかりました。このことから、学生の「総合満足」が低い科目の授業改善を促すことが十分に達成できたといえます。

今後FD委員会では、「いい授業」とは何か、「学生を伸ばす教育」とは何かを考え、大学教育の発展を試みたいと思います。

人間学部で学生の能力・資質を引き出すことを目的とした「自己発見レポート」を受検しました。

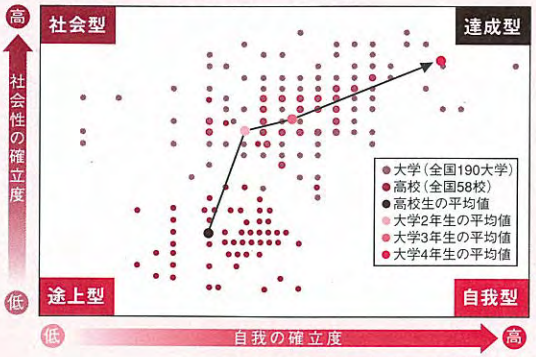
「自己発見レポート」※とは、今大学が抱えている『いかに学生の学習意欲を向上させるか』という課題を解決するための1年生向け進路支援ツールです。平成15年度は全国で5万人以上が受検しており、人間学部では、2003年7月に164名が受検しました。

このレポートにより、新入生は自分自身の弱み・強みを早期に理解し、自ら4年間の目標を設定することによって、将来の自分をイメージし、大学生活の大切さに気付きます。学生たちの能力や資質を知り、学生の満足度を向上させることで、大学全体を活性化していきたいと思います。

右の図（自我の同一性の確率度）は、高校生・大学生を対象に、社会性と自我の確立を調べた結果です。社会性・自我ともに確立度の高い「達成型」は、「自分が何者なのか」を知り、「自分は何を学びたいのか」「何のために学びたいのか」が明確な学生。その対極にあるのが、社会性・自我ともに確立されていない「途上型」の学生。高校生の多くはここに位置しています。無目的のまま進学し、自分はどうなりたいのか、何をしたいのかも分からないままの「途上型」にある学生を、一日も早く「達成型」に育成すること。そのために、人間学部ではまず、学生一人ひとりに自己を発見させることから、学習意欲を引き出し、より充実した授業を目指しています。

※自己発見レポートは、ベネッセコーポレーショングループが開発した進路支援ツールです。

■ 自我の同一性の確立度（学校単位の分布相関）



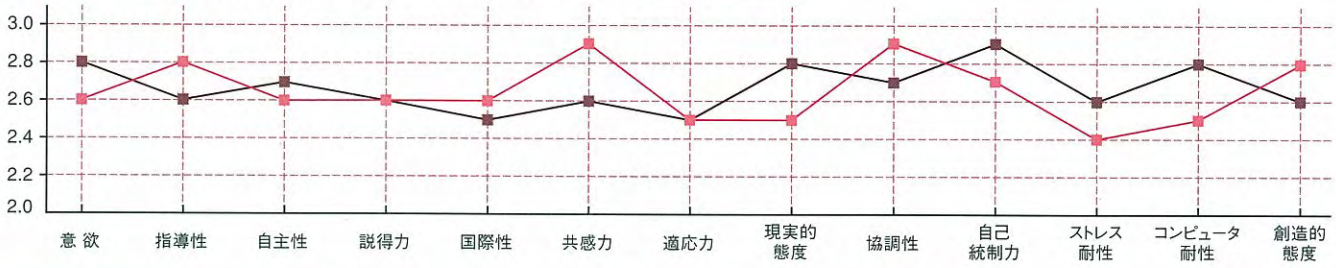
ベネッセコーポレーショングループ進研アド調べ

結果報告

※受検者には、結果をグラフで表示したものに、それぞれ個別のコメントを添えて返却しています。

社会的強み

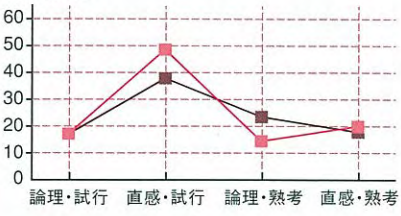
13項目それぞれに対し、偏差値をもとに5段階で表示。 ■全国平均値 ■人間学部



学習スタイル

■全国平均値 ■人間学部

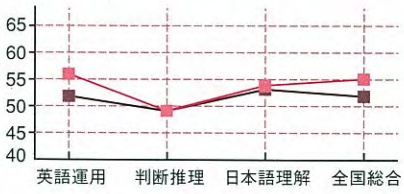
論理・直感、熟考・試行という2つの軸で、学習スタイルの傾向を表示。



能　力

■全国平均値 ■人間学部

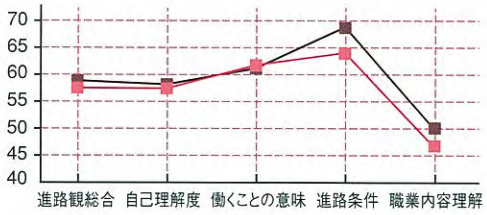
「英語運用」「日本語理解」「判断推理」「全体」のそれぞれについて、偏差値をもとに5段階で判定。



進路について

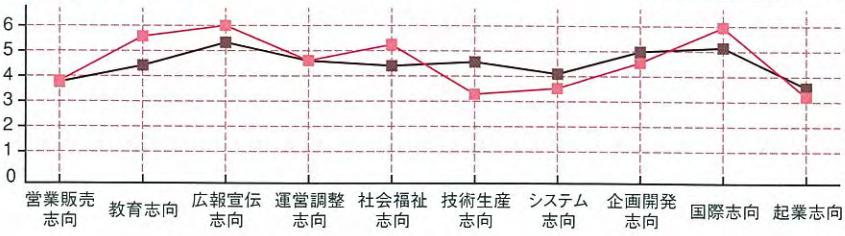
■全国平均値 ■人間学部

進路準備の成熟度を%で表示し、3つの段階値で判定します。



職業興味

職業に対する指向性の強弱を表示。 ■全国平均値 ■人間学部



人間学部の1年生は、人の考えや心を理解して受け入れようとし、お互い協調して物事を解決する意識が高いといえます。しかしストレスに対しては、やや弱いところもみられます。学習スタイルでは直感・試行型の割合が高く、感性に重きを置き、実践しながら物事の理解を深める傾向があります。能力面では、英語・日本語で全国平均を上回るものの、判断推理は平均にとどまっています。他の学生と協調して学び合うことや、創造性の高さを生かし、より学習意欲や自主性が高まるような授業の工夫を行うことによって、授業を通して人間的にも成長することができるのかもしれません。　「自己発見レポート担当者より」

人間学部は、人間関係の喪失が強く叫ばれる時代に誕生しました。人間学部は、社会・教育・心理・国際・コミュニケーションを5つの柱として、実践的教養を身につけることを目指す学部です。と同時に、自分の頭で考え、主体的に行動する人間の養成も目的としています。そのために、人間学部では、自己を発見させ、学習意欲に満ちた人間を養成するための実践的な教育が行われています。

人間学部長　宮本 盛太郎

TOPICS

NEWSPAPER 〈平成16年1月20日 中日新聞〉

● 中日新聞［平成16年1月20日（火）発行］において本学の【授業参観／同僚に学ぶ】紹介記事が掲載されました。

教員が互いに授業評価

名城大

意見ぶつけ合い参考に

公開で学生にも緊張感

教育環境の改善を掲げる名城大（名古屋市天白区）は本年度から、教員が互いの授業を見学し合うプログラム「授業参観／同僚に学ぶ」を始めた。2000年度から実施している学生の授業評価に加え、同僚の教員の意見も授業の進め方の参考にしようという全国でも珍しい試みだ。見学後に設けられた意見交換の場では、「より良い授業」をめぐる先生たちの本音や悩みも聞こえてきた。

（社会部・後藤　厚三）

ある日の1時限目の大教室。上山智・理工学部助教授(41)が開く「半導体工学」の授業に、教室を埋めた150人近い学生たちが耳を傾ける。学生だけでなく、同じ理工学部や農学部の教授ら計5人も教室内で授業を〝参観〟する。

上山助教授がまず話題にしたのは昨年秋の総選挙。「理工系は冷遇されているのが現状。働く環境を良くするためにも、政治への関心を持って」と呼び掛け、授業に入った。進め方は、内容を説明しながら数式やグラフを板書する伝統的スタイル。私語を交わしたり居眠りしたり、携帯電話を触ったりという学生の姿は、ほとんど見あたらなかった。

一方、見学側の教員は教室の最後方に着席。メモを取るだけでなく、時折立ち上がって学生たちの様子をうかがう。

授業後、太陽電池の研究をしているという理工学部4年の畑佑樹君は「（他の教員が授業を見ていた件は）ぜんぜん気付かなかった」と少し驚いた様子。「必修ではないけど、半導体は関心のある部分なので受講している。上山先生は質問も随時受け入れてくれるし授業も良い。公開はいいことだと思う」と語った。

見学した授業について意見交換する参加者ら＝名古屋市天白区の名城大で

授業後の検討会は、校舎最上階のレストランでコーヒーを飲みながら開かれた。①相手を思いやる②授業改善のためのアイデアを気軽に出すーとの約束ごとがあり、雰囲気は和やか。しかし、意見のやりとりが進むにつれ「学生に何を、どれだけ理解させるか」という授業の基本をめぐって、意見がぶつかり始めた。

「学生の理解度を考えると、授業内容が難しすぎる」「板書しかノートに取らない学生もおり、ポイントを書いてあげても良いのでは」との意見があれば、別の教授は「いや、教育には厳しさが大切」「嫌われる先生がいてもいい」と反論。

「きめ細かい授業をしようと思えば70人から80人が限界」との声や「学生たちは目立つことが恥ずかしいのか、授業中にはなかなか質問しようとしない」「7割程度の学生が予習をしておらず、現状で期待はできない」などの悩みも漏れる。

上山助教授は松下電工で14年間、半導体デバイスの研究をしていた。長い企業経験の一方、教壇に立つのはことしで3年目。授業に入る前に企業での経験談や社会の出来事を話すよう心掛けている。「社会で必要な、人と協力したり交渉したりする力を身につけてほしい」との願いからだという。

今回の試みは「これまで他の先生の授業は見てもいけない、批判してもいけないという雰囲気があった。オープンになれば緊張感が生まれ、意見を聞くことも参考になるはず」と歓迎。「来週、授業参観に参加する。ふだんとは反対側から学生の様子を見てみたい」と笑顔を見せた。

名城大は、2000年度から学生による授業評価を実施。本年度からは民間企業で顧客満足度を測るために用いる「CS分析」を東海3県の大学で初めて導入している。参観には学生側の評価に教員側の相互評価を重ねることで、授業改善の相乗効果を図りたいとの考えがある。

企画・実施にあたった同大の大学教育開発センターによれば、今回の授業参観は約450人の専任教官全員に実施を説明。全体の2割に当たる80人から「参加する」との返答があり、10月末から12月初旬までの間に計28回の授業参観を実施した。

センター長の杉下潤二教授(67)は「授業参観は、見学者の参考になるのはもちろん、教員・学生の双方に授業への緊張感や責任感が生まれた」と評価。来年度はさらに実施数を増やし、検討会を充実させる方針だ。

杉下センター長は「私学の運営は学生が納める授業料に多くを支えられており、学生には『鍛える』『訓練する』という面を含んだ質の高いサービスを提供する必要がある」とその意義を強調。「『これだけやっているのに』という教員の意識と、学生の実際の理解度に落差があるケースは少なくない。学生や同僚による評価が、その差を把握しながら縮める『より良い授業』への参考になるはず」と、成果を期待している。

推薦図書紹介

「成長するティップス先生」 出版社:玉川大学出版部　著者:池田輝政・戸田山和久 近田政博・中井俊樹

本書は、大学教員のための授業の秘訣集（ティーチング・ティップス）です。ティップス先生の授業日誌編と、授業の基本編の2部で構成されており、授業現場においてティップス先生が悩みや失敗を重ねながら授業を展開していく様子が臨場感あふれる内容で描かれており、授業改善の秘訣にあふれた参考書です。

発刊年月:2001年12月
総ページ数:186ページ

「大学は学生に何ができるか」 出版社:プレジデント社　著者:増田晶文

金沢工業大学で「大学改革」はなぜ成し遂げられたのか、1200校もの大学・短大の中から文部科学省「特色ある大学支援プログラム総合分野」で選ばれたのか。ノンフィクション作家としての実績のある増田昌文氏が1年に及ぶ金沢工業大学の取材を通して感じた「人を元気にさせる教育空間」について、深く考えさせられる一書です。

発刊年月:2003年12月
総ページ数:214ページ

名城大学FD委員会広報誌 — Vol.2

Meijo FD NEWS

発行日　平成16年3月31日
発行者　名城大学 大学教育開発センター
〒468-8502 名古屋市天白区塩釜口1-501　TEL.(052)838-2033（ダイヤルイン）
ホームページ http://www.meijo-u.ac.jp/　Eメール edcenter@ccmails.meijo-u.ac.jp
編集協力　（株）進研アド　名古屋支社

この印刷物は、古紙配合率100%再生紙と環境にやさしい植物性大豆インキを使用しております。